



→波の穏やかな川面に  
秋の雲が写っていた。

←矢切畑にいくつかある田んぼで稲刈りが始まった。何軒かが共同で稲刈り機を購入し順番に使用する。みんな年寄りだ。



ときの過ぎゆくまを惜しむかのうようにセミがせわしなく鳴く。ツクツクボウシだ。このセミが鳴くようになると名実ともに夏は終わりだ。

矢切畑では稲刈りが始まった。おばあちゃんが稲刈り機のはいれない田んぼの周囲の稲を手で刈っている。

今年の夏は異常気象続きで収量を心配していたが、おばあちゃんによると「今年のできはいつもの年とかわらないよ、よくできた」

農家の人たちの心配はどうやら杞憂にすぎなかったようだ。この土日の晴天でたぶん矢切の稲刈りはすべて終わるだろう。

稲を刈り終わった田んぼには落ち穂を求めてハトがやって来るだろう。

そういえば東京の浅草寺や柴又の帝釈天に群れていたハトたちは、どこにいったのだろうか。稲刈りの終わった矢切の田んぼにやってくるハトを見るたびにそんな疑問がわく。

九月七日にいつせいに芽を出した彼岸花が十日には咲いた。いつもの年より早いように思うがと舟頭さんといっ

## 今週のクマ

→どういう加減なのか、  
栈橋にやって来たクマは、  
じっと水面をのぞき込む。



→彼岸花が集団で芽を出し、咲き始めた。この花は、咲き終わってから葉をしげらせる。キツネノカミソリとは逆の不思議な植物だ。



たらずかさず、

「そうなんだよ、どうして彼岸花は毎年時期をたがわずに咲くんだろうとオレも不思議に思ってるんだよなあ」

気温だろうか、日長だろうか、それともほかに要因があるのだろうか？

今年の夏は曇天が続いた。夏日と呼ばれる気温三十五度を超えるような日は、ほとんどといっていいほどなかった。

「それから考えると彼岸花は夏場の気温とは関係ないみたいだねえ」

という舟頭さん、

「やっぱり日長じゃないかなあ。だんだん昼が短くなつてくると咲くんじやないかなあ、ぼくはそう思うんだけど……」

と、私。

「それにしてもさあ、彼岸花って種ができないよな。それなのにふえてるんだけど、あれはどうしてなんだろう」

江戸川の堤防を下りて河川敷を矢切の渡しに向かう小道の両側に彼岸花が芽を出している。自分では植えた記憶もないのにそのことを舟頭さんは不思議がる。

彼岸花は不思議な花だ。種ができないのにどうしてふえるのか。なぜ時期を間違わずに咲くのか。矢切の七不思議だ。